

孤高のホルモン



俺たちは、一体
ホルモンの何をわかったつもりでいたのか

ホルモンもいしょう

第1章

ホルモン炎上カメラマン

炭火七輪の宇宙に浮かぶ、 ホルモンという名の小惑星



ホルモンと炭火七輪。
これがないければ、いまの私は存在しない。

他の何にも代えられない、
私の魂を強く揺さぶる存在。

これは私の活動の証。
感じたすべてを全力で、
一枚の写真と文章に、全身全霊で閉じ込める。

この想いを、ずっと忘れないように。

戦場のホルモン炎上カメラマン



ここはとあるホルモン店。
木造家屋のダクトから狼煙が上がると、
客が列を成して押し寄せる。

弾丸のごとく肉と酒が飛び交い、客席の至る所で
七輪が炎上し、スタッフが即座に消火活動を行う。
うっかりタレで服を汚せば、
洗剤のついたおしぼりで救護される。

喰う者も、喰われる者も、常に戦い。
ここは、まさに戦場だ。

そして私は、戦場カメラマン、
「ホルモン炎上カメラマン」なのだ。

胃袋の実家



むき出しのダクト、少し焦げた木のテーブル
着席した時のしっとり感がたまらない。

不安定な椅子、熱で歪んだメニュー
流れる懐かし J-POP。

炭火七輪の脂の香り
ずっと深呼吸していたい店の空気。

感慨無量。
そう、ここは胃袋の実家だ。

ホルモン シマチョウ マルチョウ
これぞ我らの三種の神器！





この肉を前にする時
そこに老いも若きも、男も女も関係ない。

ただ勇ましく、胃袋の持てる力の限り
その肉に無心で喰らいつくのだ。

網上の美学



ホルモン店に行く前日、
肉のオーダーと戦略を立てる。
野球で言うなら私は監督。
なじみの店が公式戦なら、
伝説の名店は日本シリーズだ。

テーマに沿って肉種を選び、
スタメンを完璧にそろえる。

今日は何が新鮮か？
欠場選手が出るかもしれない。
周りの卓の肉を見て、臨機応変に戦略も変える。

私は投手で、網はマウンド。
網上での振舞いにも美学がある。

バッテリーを組む相手も重要だ。



そして、今日も優秀な選手たちが、
美しくグラウンドにそろったようだ。

考えるな、感じろ！
燃えよ！ホルモン！！



一万人に理解してもらおうより、
敬愛する、たった一人に声が届けばそれでいい。

万人受けする薄っぺらな言葉で何かを言うなら、
それは本当の自分の声じゃない。
そこに自分の魂はない。

だから今日も、胃袋の底から叫び続ける。
全身全霊、力の限り。

そしていつか、
この狂気じみた叫びに気付いた他の誰かが、
ちょっと振り返ってくれたらそれでいい。

これは私の共鳴する魂の叫び！



東に炭火七輪あれば、
行って、ホルモンを炎上し、
西にガ스로ースターあれば、
行って、ホルモンを炎上する。
そういう肉を、私は撮りたい。

続きは本編で
お楽しみください！